

閉じつつ開かれるこどもの居場所

—東経 135 度に位置する児童施設計画—

社会背景

○経済成長

日本は戦後から経済成長を遂げ、文化などあらゆる面で発展してきた。しかし、経済発展に伴い、豊かさを実感する機会が増える一方で、こどもたちの遊び場は減少してきた。また、近年ではこどもたちの貧困も問題となっており、貧困が原因で塾や習い事など、学校以外での学習する機会が少ない。

○家庭環境の変化

児童数の減少、母子・父子家庭の増加、多世代同居世帯の減少など、家庭を取り巻く環境が変化しつつある今日では、地域間の手助けや血縁によるサポートが少なくなり、子育てが孤立しやすい状況である。

○これまでの児童館

法律上は0歳から18歳未満までのこどもを対象とした施設であるにもかかわらず、小学生の放課後の受け入れというイメージが強く、中高生までが利用できる施設であるとの認識が弱いなど、児童館の本質的な機能がまだ認知されていない状況である。児童館は全国的に小学生以下と中高生で分けられており、また、問題を抱える子と一般の子が一緒に施設を使うというケースが少ない。

選定敷地

兵庫県明石市の海沿いに位置し、東経 135 度の日本標準時子午線が通る場所である。

「時のまち明石」として、時間を刻む特別な場所である。また、明石市は 2015 年から「こどもを核としたまちづくり」をスタートさせ、子育てに力をいれ、こどもや子育て世代への投資をきっかけに、6 年連続人口増加や 4 年連続出生数の増加、財政収支の黒字化など町を活性化している。



提案

他者にありのままの自分をさらけ出し、肯定的に受け入れられることで、安心して、くつろぐことのできる、こどもたちや子育て世代の「居場所」を設計する。

年齢の差を超えて様々な人が集まるからこそ、多様な知識を身につけ、成長できるのではないかと考える。そのためにも、これまでの児童館やコミュニティセンターではなく、こどもたちが安心できる環境であり、将来の自立に向けて生き抜く力を育む、こどもたちの「第三の居場所になる施設」が求められる。

○3つの機能

i) 一般学生に向けたワークスペース

全国的にも中高校生が学習を自主的に行うことができる空間が少ないのが現状であり、またこどもの貧困問題として、経済的に習い事ができないこどもが増えている。そのことから、地域と連携したこどもたちが学び成長できる空間。

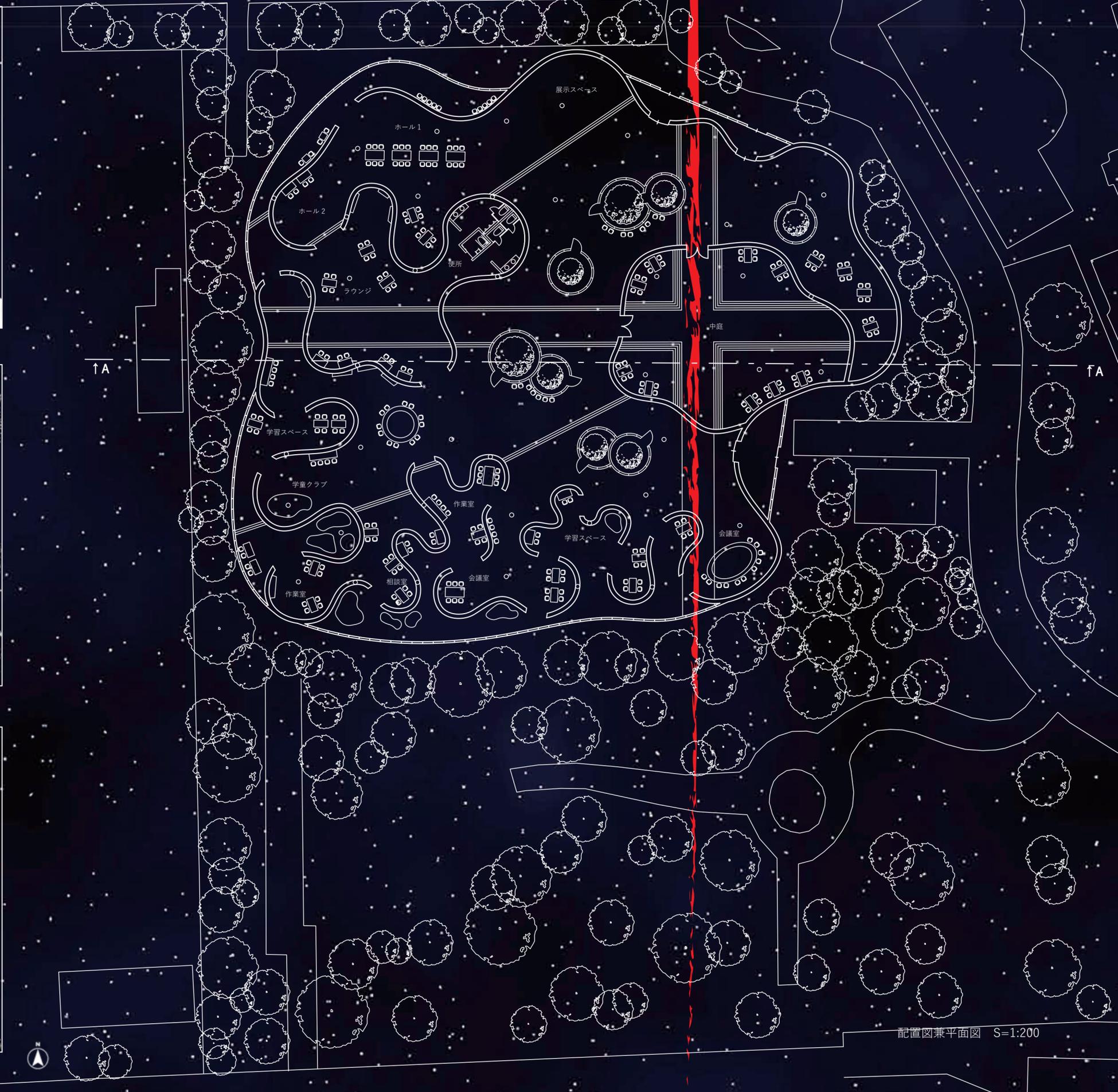
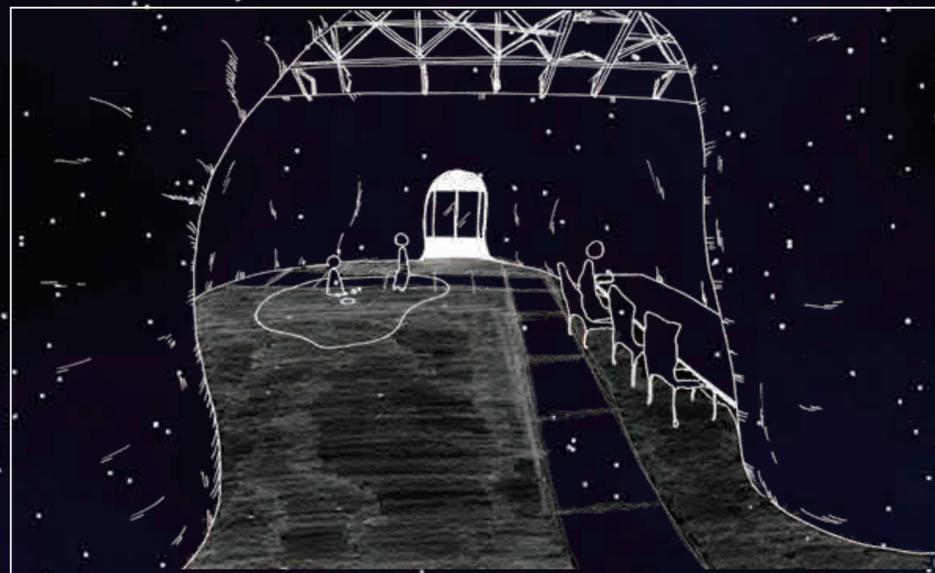
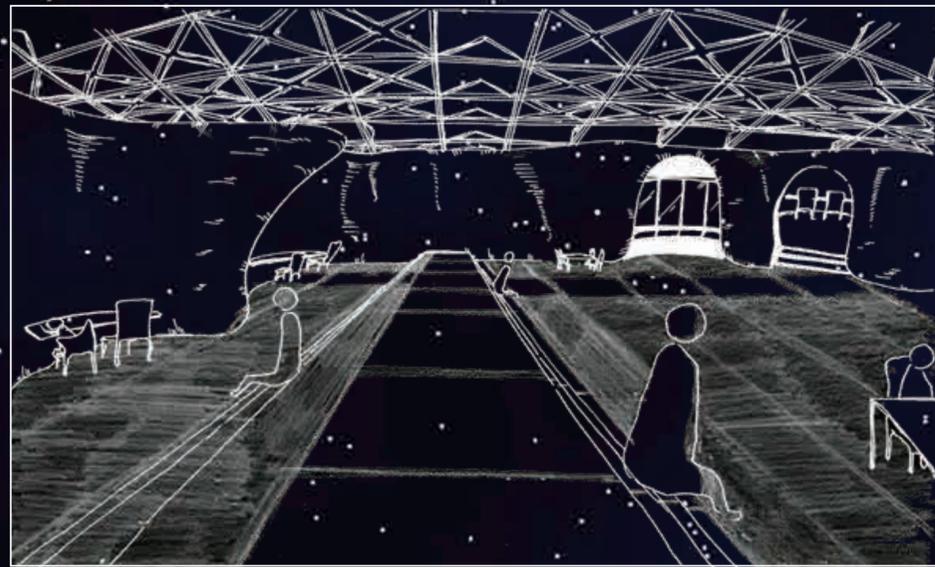
ii) 不登校児などの社会支援

問題を抱え、学校に行けないこどもたちがステップを踏み少しずつ社会に関りを持ち、視野を広げ、学校と同じように幅広い知識を身につけることを目的とした空間。

iii) 保護者に対する子育て支援

地域との繋がりの希薄化や、家族形態の変化などにより、子育ての孤立しやすい状況が問題となっている。そのことから、同じ年齢のこどもや親が交流することにより、子育てについて気軽に相談し、子育て仲間をつくることのできるような空間。

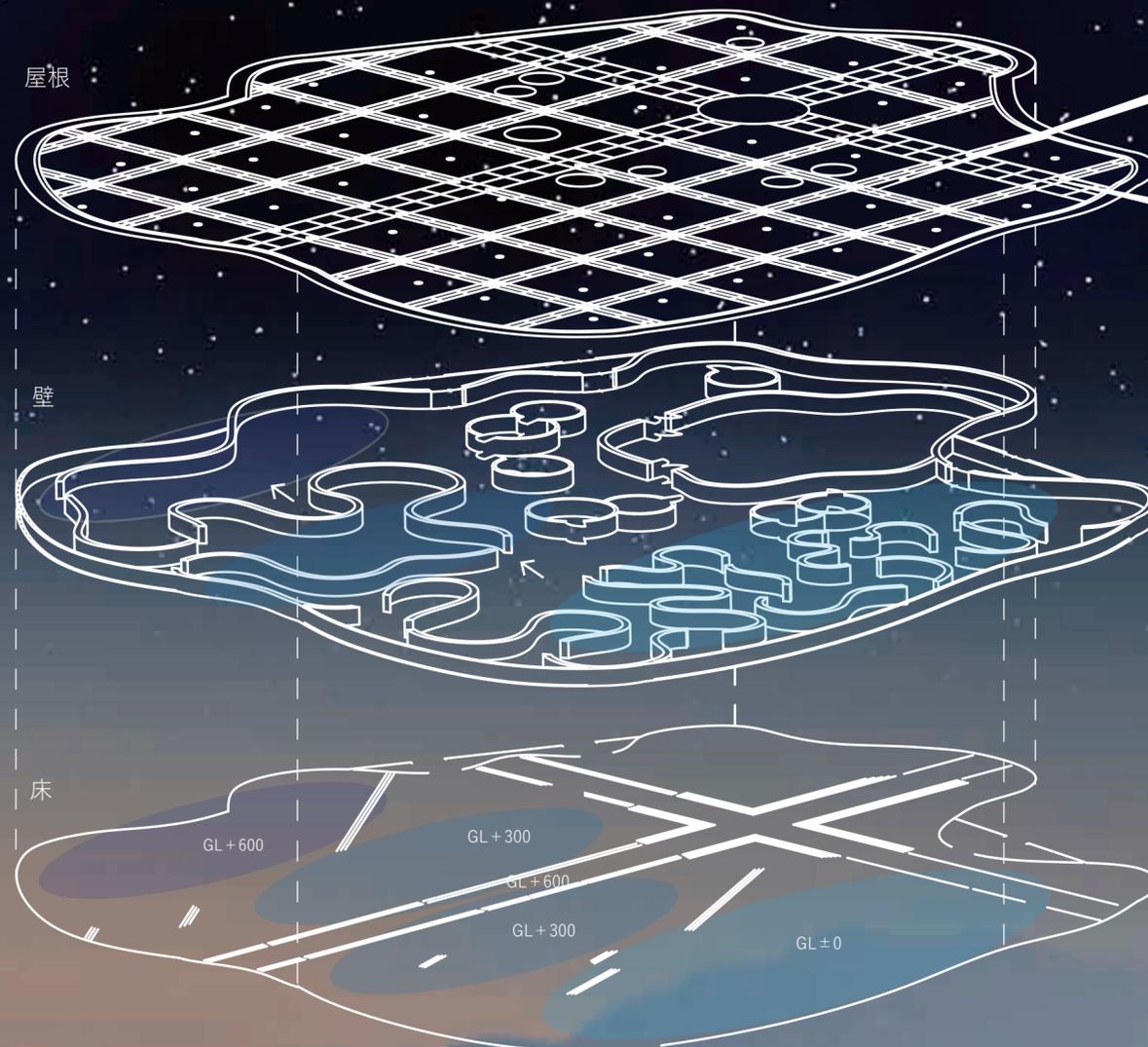




ゾーニング

廊下をなくし、個室という閉ざされた部屋をつくらず壁で空間をつくり、利用する人が自然と交じり合う空間とします。また、機能や年齢別にゾーニングするのではなく、自分たちで空間をつくり、機能を分散・混合することで人々が動き、交流が生まれる空間を目指す。

木は構造体になり、仕上げ材になり、開口部にもなり得る。耐震壁から壁、そして開口へとシームレスに繋がる一枚の壁でつくることにより、新たな木造建築の一つのあり方を示す。



グリット状にトップライトを設け、床が屋根からの光でグリットが映る

東経 135 度のラインと垂直なラインを他のトップライトよりも大きくし差別化をはかる

帯をイメージし、敷地に沿うように曲げる

曲線にし、建築の表裏の関係を曖昧にする

空間の完結性や閉鎖性の排除

人間の行動が限定・収束されずらくなる



ステップを踏む

空間が広がっていく

コミュニティが広がっていく

・自分の視野を広げる

・居場所を広げる

